

「源氏小鏡」に関する一考察

—その梗概化をめぐる—

増 田 京 子

はじめに

日本の古典文学の最高峰として名高い「源氏物語」の梗概書のひとつに、「源氏小鏡」がある。その「小鏡」の特色は、「源氏大鏡」などと異なっており、一部の和歌のみを採ることと、「源氏物語」中の語句を連歌寄合として所々に列挙することである。「小鏡」の著者にも擬せられる二条良基は、連歌において「源氏物語」を重視し、「源氏寄合ハ第一事也」(九州問答)と断言している。「源氏物語」は、連歌師にとって必読の書とされていたのである。このようないきさつから寄合の詞を併せ持つ「小鏡」は、連歌を詠む際の手軽なハンドブックとして利用されてきた。また、連歌師のみならず一般の人々にも、長大な「源氏物語」の内容を容易に知り得る便利な書として広く読み継がれたらしく、近世に至ると幾種かの版本が刊行されている。その版本のうちの一本が、岡山大学附属図書館池田家文庫に収められている。これは、上・中・下三巻三冊の須原屋版(刊行年未詳)で、伊井春樹氏の分類

によれば改訂本系小鏡にあたるものである。本稿では、この池田家文庫本を用いて、「源氏小鏡」の梗概の特徴について考究したい。

一

最初に、「源氏小鏡」の梗概化のあらましを、本文の分量および和歌数という量的な比較によって見ていくことにする。本文の分量は、「源氏物語」(源氏物語大成校異篇)と「小鏡」双方を原稿用紙(二行二〇文字)に直した際の行数で、和歌数は「源氏物語」所収の和歌数と「小鏡」に引かれている和歌数とで比較した。まず本文の分量では、「小鏡」は「源氏物語」の約六・二%の行数となり、つまり五十四帖を三帖分ほどにまとめたことになる。次に和歌数では、「源氏物語」の七九五首の和歌のうち、一六・五%にあたる一二一首を引いている。しかし、本文の分量にしても和歌数にしても、全体が均等に縮小されているわけではない。本文の分量を例にとると、「源氏物語」そのものが平均の二倍以

上（若菜下など）、または二分の一以下（篝火など）の巻を除いても、やはり巻ごとに大きな差がある。そのうち、本文の分量・和歌数ともに割合の高くなっている巻を巻序に従って挙げてみると、桐壺巻・夕顔巻・須磨巻・御法巻・幻巻などとなる。極端に長い巻以外では、どれも光源氏に大きな転機が訪れる巻であることは周知のとおりである。一方、本文の分量において玉鬘十帖が五・〇％、宇治十帖が四・二％というように割合が低くなっている。これは別伝としての色合の濃いものよりも、光源氏と紫の上を中心とした物語に、より重きが置かれていたためと思われる。

ところで、「小鏡」に寄合の詞が載せられていることは、先に述べたとおりである。寄合の詞とは、連歌における付合の契機となる語句であるが、「小鏡」では時にあらずしとしての役割を担うこともある。次に、この寄合の詞のうち列挙されているものと、明らかにものみの数を巻ごとに調べてみると、三四〇語の寄合の詞を見出すことができた。そのうち、五九・一％の二〇一語までが、桐壺から明石という早い巻に集中しているのである。中でも、須磨巻の三五語は一卷あたりの平均六・三語を大きく上回っており、桐壺巻・夕顔巻においても二〇語以上の寄合の詞が挙げられている。逆に、寄合の詞の全く見られない巻も十巻あり、そのなかに玉鬘十帖と宇治十帖がそれぞれ三巻ずつ含まれている。これら以外の巻についても、本文の分量や和歌数の割合が高いものほど、寄合の詞も多くなる傾向にある。しかし御法巻と幻巻

とは、量的には多かったにもかかわらず、寄合の詞が極端に少ない。御法巻では全く見られず、幻巻でもわずかに二語を数えるのみなのである。この両巻については「小鏡」に、「此巻、中（ことばもなし）」（御法、中・35才）、「御法、幻二の巻は、いづれもおもしろけれども、取わきたる事なし」（幻、中・39才）という記述がある。つまり寄合の詞はないが、「おもしろい」という理由であらずに多くの紙幅が費やされているのである。このあたりに、「小鏡」の著者の興味・関心の一端がうかがえるように思われる。

二

次に、「小鏡」の叙述の内容について見てみよう。「小鏡」では、五十四帖の巻順にそれぞれのあらずしが述べられている。各巻は「この巻を○○といふこと……」というような巻名の由来で始まり、その後それ以外の部分のあらずしが述べられる。なかには朝顔巻や常夏巻のように、巻名の説明に終始する巻さえみえる。ちなみに、採択された一三一首の和歌のうちの三三首はいわゆる巻名歌である。つまり、一般に巻名歌とされている和歌のほとんどが採られていることになる。このように「小鏡」が巻名を重視する傾向にあるのは、ひとつには「源氏物語」の巻名そのものが、寄合の詞として連歌に用いられたためと考えられる。連歌の付合に際して、巻名にふさわしい語句を選ぶためには、その由来をよ

く知っておく必要があったのである。ところで、巻名とは本来その巻の最も中心となる内容を、最も端的に言い表したものとしよう。換言すれば、究極の梗概が巻名なのである。したがって、巻名の由来を説明することは、同時にその巻の最も中心となる最小限の内容を説明することになる。連歌に詠み込むために巻名の説明を優先させた結果、「小鏡」の梗概は、非常に簡潔でありながら射たものとなっているようである。

さて、「小鏡」のあらすじを「源氏物語」の原文と比べてみると、表現の相違のみならず、原文にはない「小鏡」独自の内容も見られる。つまり、「小鏡」は「源氏物語」の言葉を機械的につなぎ合わせたのではなく、作者自身の言葉で再編成したものに なっているのである。さらに巻名の説明のほか、語句や有職故実などに関する注釈も多く施されており、梗概書というより注釈書に近い部分も見受けられる。そのためか、例えば舞の名称を漢詩の題としたり（花宴、上・19才）、和歌の出所を取り違えたり（花散里、上・26才）するような、明らかな誤りも少なくない。

また「小鏡」では、物語の流れが必ずしも守られていない。その一因はもちろん、巻名の説明を優先させたことにある。しかし、巻名についての説明の部分を除いてみても、依然として順序の乱れは存在する。そればかりか、別の巻の内容が入りこんでいる場合さえある。内容の上で深いつながりがあれば、巻という枠組みよりも場面の連続を尊重した結果であろうか。

以上のように「小鏡」の梗概は単なる要約ではなく、作者によって再編成されたものである。結果として時に誤謬も散見し、順序の乱れも生じている。しかしここで確認しておきたいのは、巻名や内容のまとまりなど、物語の場面を重視する作者の態度である。

三

「小鏡」が機械的な作業によって梗概化されたものでない以上は、すべての内容が盛り込まれたわけではなく、そこには当然切り捨てられていった場面もあろう。そこで、「源氏物語」を場面に分けた上で、「小鏡」の場面取捨の様子を調べてみたい。なお、場面と一口に言っても、その定義や分け方はさまざまに考えられる。ここではひとまず「新潮日本古典集成」本に従うこととした。すなわち、「集成」で小見出しを付けて区切っている小段落を、場面と見做すのである。もちろんその場面に長短の差はあるが、「源氏物語」には全部で一七〇八の場面があった。そして、そのうちの二五・二％にあたる四三一場面が「小鏡」に採られていることが知られた。^⑤

それでは、「小鏡」は「源氏物語」のどのような場面を積極的 に採っていったのであろうか。そこでまず、「源氏物語」のすべての場面を主な内容によって、便宜的に次のような一八の項目に分類した。

25 蛭	24 胡	23 初	22 玉	21 少	20 朝	19 尊	18 松	17 松	16 松	15 蓬	14 澤	13 明	12 須	11 花	10 貴	9 葵	8 花	7 紅	6 木	5 若	4 夕	3 空	2 帶	1 桐	巻 名	項 目
姫音姫女					顔雲風合屋					生標石磨里					木実摘花					紫願蟬木杵					①恋愛 ②逢瀬 ③幸福 ④悲嘆 ⑤苦悩 ⑥思考 ⑦心情 ⑧景物 ⑨人物 ⑩動静 ⑪行来 ⑫政治 ⑬儀式 ⑭宴遊 ⑮病・死 ⑯論・談 ⑰言動 ⑱消息	源氏小鏡 計 源氏物語
0 5	1 6	0 1	2 4	0 1	0 2					1 1	1 2	1 1			0 2	0 2	1 1	1 2	4 4	1 3	1 4	1 3	1 1	1 1		
1 5	0 4	0 1	1 1	0 1						0 2	1 1				1 4	1 1	1 1	1 1	1 4	1 2	3 4	3 2	0 2			
		0 1								1 1	0 2				0 1	0 1										
		1 4		0 1	1 1	1 2				1 1	2 5	2 9			0 6	2 6				0 2			1 2			
0 1	0 2			0 2	0 2					0 1	0 1				0 2	0 2				0 1	0 1					
0 1		0 1		2 4						0 1	0 2	1 2	1 2		1 2	0 2				2 2						
0 1		1 1	0 1	0 1	0 1	0 1				0 1	1 1	0 2			0 2					0 2		0 1	0 1			
	1 2	2 2	0 1	1 1	0 1	1 2				2 3	3 3	2 4			1 1					0 1						
0 1	0 1	0 3	1 3	0 3	0 3	0 3				1 5	0 2	1 4			0 1	1 4	0 1	0 1	2 3	2 1	1 5	1 4	2 4			
1 1	0 4	2 4	0 1	0 1	0 1	0 1				1 6	1 2	0 2			1 1	1 1	0 1	1 1	1 4	1 3	1 1	0 2	2 3			
	0 4	1 5	1 3	1 2	2 3	2 2				1 1	0 3	2 3	2 4	0 1	2 2	0 3	0 1			1 9	0 3	1 2	1 3			
	0 5			2 4						1 4	1 2				1 5	0 1	0 1						3 3			
	1 2			0 1						1 3	1 1				3 3	1 1				0 1			3 4			
0 1	0 2	0 3	1 4	1 1	1 2	1 5				1 1					1 1	1 3	1 4			0 1						
1 1		1 3		1 1	3 1					0 3	0 1				2 3	5 7				1 3	4 5	1 5	4 5			
0 2	0 1	1 3	0 2	0 2	0 2	0 2				0 1	2 3	0 2			0 3	1 2	0 1					3 20				
0 1		0 3	0 1	0 1	0 2	1 2				0 2	2 1	0 1			0 1	0 1	0 1					0 1				
0 1	0 1	1 1	1 2	1 2	0 2	3 1	1 2			0 1	1 1	0 2	2 6		1 6	0 2	0 2	1 1		0 2		2 2				
2 17	2 20	2 11	10 23	11 41	1 27	6 17	7 16	4 12	3 5	7 19	6 30	18 29	11 34	1 4	9 44	17 40	3 6	6 20	3 18	9 31	11 20	5 8	9 32	16 19		

△巻別・項目別場面数△

各項の下段は「源氏物語」の場面数、上段は「源氏小鏡」の場面数である。
なお「源氏物語」に、その項目に該当する場面のない場合は空欄とした。

- ①恋愛
- ②逢瀬
- ③幸福
- ④悲嘆
- ⑤苦悩
- ⑥思考
- ⑦心情
- ⑧景物
- ⑨人物
- ⑩動静
- ⑪行来
- ⑫政治
- ⑬儀式
- ⑭宴遊
- ⑮病・死
- ⑯論・談
- ⑰言動
- ⑱消息

次にそれらの場面を、和歌・寄合の詞を含めて、「小鏡」が
らすじに取り入れているかどうかを巻ごとに調べた。その結果を
表にまとめておく。

%	計 源氏小説	54 夢手	53 浮	52 浮	51 浮	50 東宿	49 早	48 早	47 早	46 早	45 橘竹	44 橘竹	43 紅	42 紅	41 幻	40 夕	39 夕	38 鈴	37 樓	36 柏	35 若菜	34 若菜	33 藤菜	32 藤菜	31 真木	30 藤行	29 藤行	28 野	27 野	26 常
	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語	源氏物語
24.5	27 110	0	1	1	1	0	1	0	0	0	1	1	1	0		3	0	1	1	1	0	2	0	0	0	1	0			
34.6	28 81		3			0	1	1			2	2				0						1	2	1	1	0	0	0		
7. 1	1 14					0		0														0	0	0					0	1
28.3	26 92	0	0	0	2	0	1	1	4	0	0	0	0	2	1	1					1	0	1	0	1					
5.8	3 51	0	0	0	0	0	1	0	1					0		0					0	0	1	0					0	2
19.7	12 61	0	0	0		1	0		1		1					0	0	1			1			0		0				
17. 3	14 81	0	2	0	2	0	0	1	1		0	0	3		0	1	0	0	1		0	0	1			0	0			
47.7	21 44	0	1	0	1	0	1	0	0	1				2		1			0		0						1			
20.5	33 161	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	2	4	1	0	0	0	0	1		6	1	0	0	0	0			
25.8	41 159	1	2	0	7	2	0	0	4	0	5	0	0	0	1	1	1		1		3	0	0	0	1		0		0	
25.5	60 235	1	2	0	6	5	5	1	1	2	1	0		2		2	4	0	1	0	1	0	0	0		1	0	0	0	1
34.8	16 46					0		0			2	0	1						1		1	3	3	0	0					
41.9	18 43					2	0				1								2		1	2	0	0		0				
38. 7	36 93	2	0			0	3	2	0		0	0	1	0			1				7	1	2	4	0	1	1			
39. 6	42 10	3	1			0	0	1	1		1				1	5	2	0	1	3	2	1	0	1						
11.8	13 110	0	0	1		0	1	0	2	0	1	0	0	1		0	0	0	0		0	0	0			0		0		
14.1	12 85	0	0	1		1	1	0	1	1	1	0				1	0	0	1		1	0	0	0	0	0	0	0	0	
20.6	28 136	1	0	0	2	0	3	1	0	0	0	0	1		1	2	1	1	1	1	0	0	0	0		1	1	1	0	
25.2	431 1708	3	12	2	27	9	20	3	19	5	15	8	5	5	14	12	14	1	6	13	23	11	8	4	4	2	2	2	1	2

まず、巻別にこの表を概観してみよう。先の分量的な比較で割合の高かった巻のうち、やはり桐壺・御法・幻の三巻は六割以上という高率で場面が採られており、夕顔巻・明石巻も高率を示している。中でも桐壺巻は一九場面のうち一六場面と、ほとんどの場面が網羅されている。また幻巻は、もともと少し趣の異なる巻である。そこでは、紫の上に先立たれた光源氏の悲しみが、四季折々の景物に寄せた二六首の和歌に歌われている。「小鏡」はそのうちの一回首を採択し、和歌を中心としたあらすじになっている。これに対して、玉鬘十帖は一六・五%、宇治十帖は一九・八%と、ここでもやはり全体の平均を下回る結果となった。蜻蛉巻に至っては、六〇場面のうちわずかに二場面を採るのみで、ごく限られた場面だけでその巻の説明を終わるものもあることが知られる。しかし総じていえば、巻々に応じた場面の取捨選択が行なわれているようである。

四

次に、項目別にこの表を見たときに「小鏡」の採択の割合の高いものは、順に、

⑧景物……………	47・7%
⑬儀式……………	41・9%
⑮病・死……………	39・6%
⑬冥達……………	38・7%

となっている。以下、それぞれの特徴となっている場面を挙げながら、項目別に考察していきたい。

(1) ▲景物▼について

▲景物▼（建築物・情景・気象など）では、「源氏物語」の四場面のうち、二二場面を「小鏡」は採っている。それらの場面を巻ごとに見たときに注目される巻で、特に紙幅の費やされている場面を列挙してみよう。

〔須磨〕 三月上巳の日、源氏、海浜に出て御祓をし、暴風雨に襲われる^①

〔蓬生〕 常陸の宮邸の荒廃のさま

〔少女〕 六条院完成 四季の庭の情趣

〔幻〕 二月、匂の宮と紅梅と

便宜的に景物と称しているが、ここに挙げた場面は、それぞれの巻の中心的な話題に欠かせない状況設定となっている。

(2) ▲儀式▼について

次に、四三場面のうち一八場面の採られている▲儀式▼（誕生・元服・婚儀・賀など）について見ていく。この項目に含まれる場面は、主に登場人物の誕生と成長の過程を示すものである。その採り方は、儀式の事実について形式的に触れる程度となっている場合が多い。しかし、儀式に関しての詳しい解説のあることもある。例えば、桐壺巻の▲源氏の君の元服▼に関連しては、「はつもととゆひ」^②「濃きむらさき」という語句についての解説が

ある。また、葵巻の△源氏、三日の夜の餅を祝う▽場面では、源氏三箇の秘事にも数えられている「三つが一つかにもあらむかし」という件に、詳しい説明がなされている。

(3)△宴遊▽について

九三場面のうち三六場面を採っている△宴遊▽（音楽・宴・年中行事など）の主な場面としては、

〔紅葉賀〕朱雀院の行幸の試楽に源氏、青海波を舞う

〔花宴〕南殿の花の宴に、源氏、頭の中將、詩を作り、舞を舞う

〔梅枝〕薫物競べ

〔若菜下〕明石の上琵琶、紫の上和琴、女御箏の琴、女三の宮琴が挙げられる。いずれも、光源氏の榮華ぶりを示す場面として有名である。これらについては、その様子が具体的に詳しく描写されているというのが特徴である。

(4)△病・死▽について

△病・死▽（物怪・仏事・出家など）では、一〇六場面のうち四二場面が「小鏡」に採られている。その主な場面を挙げてみよう。

〔桐壺〕野分の夕べ、叙負の命婦の弔問

〔夕顔〕その夜、魔性の女が現れ、夕顔は急死する

〔葵〕葵の上、出産近く、いよいよ物の怪に苦しむ

〔御法〕紫の上、源氏、中宮と唱和ののち、死す

「源氏物語」そのものにおいて、登場人物の死の場面が巻々の

いわゆる「ヤマ場」となり、またその死をめぐる物語が展開することは少なくない。そこで、「源氏物語」を梗概化するにあつても、死の場面は欠くべからざるものであつたろう。

この△病・死▽と性格を同じくするものに、△逢瀬▽（垣間見・後朝・結婚など）がある。これも、三四・六%の高率で場面が採られている。「源氏物語」の性質を鑑みると、逢瀬の場面が多く採られているというのは当然のことである。しかし、単に数が多いというのみではない。ここで特筆すべきは、この項目には寄合の詞が集中しているということである。三四〇語挙げられていた寄合の詞のうち、約二〇%にあたる六四語がこの逢瀬の場面から採られている。寄合の詞が多いということは、それだけ連歌に詠まれる機会も多かったに違いない。死や逢瀬などは、時代を超えて人々の胸に感動を与える主題であり、場面として鑑賞に値するものであるといえよう。

以上、採択の割合の高い項目について見てきたが、それらの場面の中に、「小鏡」での記述が非常に詳しいものがある。それは前掲の、

△景物▽の〔少女〕六条院の四季の庭の情趣

△宴遊▽の〔梅枝〕薫物競べ

△宴遊▽の〔若菜下〕六条院の女樂

である。さらに、先に挙げた項目以外のものでは、

△消息▽の〔玉鬘〕年の暮、源氏、新春の晴着を婦人たちに贈る
△人物▽の〔若菜下〕源氏、女君たちを覗き見て花によそえる
がある。一例として、少女巻の△六条院の四季の庭の情趣▽から
一部を引用してみよう。

まづ南のひがしには、むらさきの上の御かた春のあけぼのを
しめ給。春のくさ木ども数をつくしてうへらるゝ。さてこそ
春の御かたとも申けれ。東の町には、花ちるざと聞えしは、
夏の御かたにて、うの花さうびくたにふちつゝ、じなどうへた
まひたり。是は南おもてなり。花ちる里によそへておもしろ
く、……
(少女、中・3ウゝ4オ)

このように、春夏秋冬の趣向を凝らした庭の情景が、そこに住
む女性との取合せとともに、事細かに説明されるのである。たし
かに光源氏が六条に大邸宅を構え、四季ごとの庭を造営したこと
は、主人公の繁栄ぶりを示す一大事といえる。しかし、その事実
だけを伝えるのに、少女巻の五分の一もの分量を費やしてまで詳
細に述べる必要はなからう。これは、物語のあらすじを述べると
いう点から見れば、はなはだ奇異であると言わざるを得ない。

五

今度は、採られることの少ない場面について見ていこう。採択
の割合が、平均の二分の一以下という低い項目には、

⑤苦惱……………5・8%

③幸福……………7・1%
⑩論・談……………11・8%

の三つがある。このうち、苦悩と幸福とはあまりにも抽象的で、
具体的な場面としては描きにくいことが低率の一因と考えられる
ところで、「源氏物語」には芸術などについての論が交わされる
場面が、しばしば出てくる。絵合巻の才芸論、薄雲巻の春秋論、
玉鬘巻の和歌論、螢巻の物語論、梅枝巻の仮名論、そして若菜下
巻の音楽論などは有名である。しかしこれらの論について、「小
鏡」では一切触れられることがない。また、帯木巻の雨夜の品定
めにおいても、採られているのは、

・馬の頭の体験談——木枯の女の話
・頭の中將の体験談——常夏の女の話
・藤式部の丞の体験談——女学者、蒜食いの女の話

という体験談ばかりで、女性論は影をひそめている。「小鏡」で
は論などという抽象的なものよりも、実際に目に見える具体的な
場面の方が多く描かれているようである。これらのことから、い
わば絵になる場面の方を好んで採るという、作者の姿勢をうかが
い知ることができるのではなからうか。

六

「小鏡」でよく採られている場面は、大きく三つに分かれるよ
うである。一つは、物語の中心となる主題に関わる場面である。

これらの場面は、梗概書として当然必要とされるはずのもので、「小鏡」の大部分はこの場面から成る。先に挙げた△病・死▽や△逢瀬▽の場面は、これに当たろう。

二つめは、物語の主筋からは外れるが、連歌師が心得ておかなければならない知識としての場面で、「小鏡」ならではのものである。実は、このことを端的に表現している言葉が、「小鏡」に見られる。

此ことこの巻にあればとて、いせなどにつくべからず。桐つばのみかといづれの巻に崩御なりけるやらんなど、人のたづねんにしらざらんはむげなれば書しなり。

(櫛、上・26オーウ)

この文章より前には、光源氏と六条御息所の野の宮での別れの場面が趣深く描かれており、その最後のところに桐壺院の死について簡単に触れられている。そのすぐ後に続く文章が、これである。この種の注意書きはこれ以外にも処々に見られ、連歌師として必要な知識の伝授を意図したような、場面の取り上げ方もなされていることがうかがえる。

そして三つめが、前述の△六条院の四季の庭の情趣▽などの場面である。その叙述は単なるあらすじとしては詳しすぎるため、かえって話の流れをせきとめ、解りにくくさえしている。また、連歌の知識を提供しているにしても、寄合の詞の列挙などに比べて、冗漫で焦点がばけている。それを、敢えて長々と描いている

というのは、作者自身の興味・関心に基づく鑑賞がなされている場面ということなのではなからうか。

作者の興味・関心という観点から、いま一度「小鏡」を読み返したとき、梗概の所々で物語や出来事を批評している言葉——評語——があることに気付く。「小鏡」で用いられている評語は「おもしろし」(前掲、御法巻・幻巻、引用参照)「あはれなり」「おもひやるべし」「めでたし」などさまざまである。これらの評語は、例えば、

かくて日をへておもりて、八月中ほどにかくれ給ふ。院の御かた、御心のうちおもひやるべし。

(御法、中・33ウ、傍点筆者)

などと用いられている。その中には批評というよりも、作者が思わず感慨をもらしたようなものもある。このことから、「小鏡」の梗概の中に作者が連歌師として、否一読者として「源氏物語」を鑑賞している姿が浮かんでくる。そして、その作者の興味・関心の示されているのが、先程来問題としている「詳しすぎる」場面であり、また取るべき語句がないからといって巻名の由来のみでは終わっていない御法巻・幻巻の梗概なのである。

おわりに

「源氏小鏡」には、「源氏物語」のあらすじを述べるほか、連歌寄合に象徴されるように、連歌を詠むための知識を説くという

特別な要素が顕著であった。しかしそれだけでなく、作者が「源氏物語」そのものを鑑賞している部分も見出だせる。その作者の興味・関心は、あらずとも連歌の知識とも関係の薄い箇所にもかかわらず、詳しく場面が描写されているところや、評語などに強く表れている。それが、連歌師のみにとどまらず、一般の人々をもその読者層に加えて、広く長く読まれた「小鏡」の魅力の所以と思われるのである。

注

- (1) 寺本直彦氏「源氏物語受容史論考」(風間書房、昭45・5)に詳しい。
- (2) 岩波古典文学大系「連歌論集・俳論集」による。
- (3) 「源氏物語注釈史の研究」(桜楓社、昭55・11)に詳しい。
- (4) 「小鏡」で異なる巻に引いている場合は、もとの巻に戻した。
- (5) 以下、「源氏小鏡」本文の引用は池田家文庫本により、上・中・下の別とその丁数表裏を付した。なお、句読点・濁点は筆者。意により内容の近い場面に当てはめた。また別の巻の内容が入り込んでいる場合は、もとの場面に戻して数えた。
- (6) 「小鏡」の内容がどの場面のことなのか限定しがたい場合も、私意により内容の近い場面に当てはめた。
- (7) 以下、場面の説明は「新潮日本古典集成」本の小見出しによる。
- (8) 以下、「源氏物語」本文の引用は、「新潮日本古典集成」本による。
- (付記) 本稿を得くにあたって、工藤進思郎先生のご指導を賜った。こ

こに記して謝意に代えたい。

(岡山県立金川高校教諭)

研究室受贈図書雑誌目録(二)

- 群馬県立女子大学国文学研究(群馬県立女子大学国語国文学会)
第十二号
- 研究紀要(尚絅学園尚絅大学) 第15号
- 言語と文学(「言語と文学」編集部) 第31号
- 言語文化研究所年報(武蔵川女子大学) 第3号
- 高知大國文(高知大学国語国文学会) 第二十二号
- 甲南國文(甲南女子大学国文学会) 第39号
- 甲南大學紀要 文学編 84
- 国語学研究(東北大学文学部「国語学研究」刊行会) 31
- 国語学 研究と資料(早大文学部国語学研究と資料の会) 第十
五号
- 国語科研究論集(福岡教育大学国語国文学会) 33
- 国語教育論叢(島根大学教育学部国文学会) 第二号
- 国語研究(岡山大学教育学部国語研究会) 第六号
- 国語研究(上越教育大学国語教育学会) 第6号
- 国語研究(横浜国立大学国語国文学会) 第10号
- 国語国文(宮城教育大学) 第16号、第17号、第18号、第19号、
第20号